紹興の宣巻

――二〇〇九年・馬山鎮寧桑村――

松家裕子

この文章は、浙江省紹興市郊外の村で、二〇〇九年に行った宣巻の調査の記録である。

宣巻は、歌と語りによる宗教的な儀礼であり、また芸能である。「宣巻」は、パフォーマンスとしての名称で、そのテキスト（台本）は「宝巻」と呼ばれる。

現存の宝巻で確認できる最初の年代は、明の正徳四（一五〇九）年である。この年、羅祖を教祖とする当時の新興教団「無為教」が、「五部六冊」と総称される宝巻を刊行した。

宝巻は、はじめは儀式の台本であったり、教義を説くものであったが、やがて、神仏たちが神仏となるまでの物語りや、人間が成仏あるいは昇仙するまでの物語りが現れた。清末には、他のジャンル（語りもの、演劇、小説）の物語りが加わった[1]。

こうして、宝巻は、現在、抄本（手書き本）、刊本（木版印刷本）と石印本として、多くのテキストが残され、ひとつの大きなジャンルを形成している[2]。しかし、残念なことに、中国文学史の中でいまだ相応の注意が払われていない。中国知識人の伝統的な文学観の影響のもと、卑俗で洗練されないという理由で、文学としての価値がなかなか認められないのである。

パフォーマンスとしての宣巻も、テキストである宝巻と並行して、行われていた。十六世紀ごろの宣巻のようすが、『金瓶梅詞話』に詳細に描かれている[3]。富豪である西門家の屋敷の奥に、女たちが集まり、線香の煙のなか、尼僧が因果の物語りと説教を語っている。

宣巻は、現代中国でも行われている。とくに改革開放の時代になって、民間の信仰への禁圧の度合いが弱まり、また都市近郊農村が豊かになると、徐々に「復活」して、隆盛が目にみえるようになってきた。このうち、甘粛省、江蘇省、浙江省の宣巻がよく知られている。

宣巻は、人類学、民俗学（民族学）、宗教学、社会学、歴史学など、さまざまな分野からのアプローチが可能である。この記録は、中国文学史、とりわけ中国歌謡史の立場から、書かれるものである。宣巻は、テキストのま

ま語りうたわれるので、文字と声のありようが同時にわかる。すなわち、パフォーマンスの側からテキストを見ること、テキストの側からパフォーマンスを見ること、の両方が可能である。これによって得られた知見は、宝巻そのものはもちろん、今は文字で見ることしかできないが、もともと音声としてのありかたがその形成に大きくかかわっていた、文学の他のジャンルについての考察においても、参照可能なものとなるであろう。

なお、はじめに、この調査と報告について、少し説明しておきたい。

この調査は、磯部祐子さん[4]と共同で、というよりは、磯部さんに筆者がついて行くかたちでおこなった。磯部さんは、一九九〇年代から、紹興において宣巻やその他の芸能について調査をおこなってこられた[5]。筆者はこれに強い関心を抱き、未知の人であった磯部さんに共同研究者になっていただけるようお願いし[6]、調査に同行させていただいた。現地研究者との連絡、調査の手配や依頼はすべて磯部さんが行われた。本報告は、磯部さんからも情報を得つつ、磯部さんの了解を得て行うものである（ただし、文責はすべて筆者にある）。まずはじめに、磯部さんに衷心より謝意を表したい。また、調査の手配や当日の通訳（公用中国語↔現地方言）などのお手伝いをしてくださった現地研究者の楊さん、宣巻を行われた、リーダー役の魯さん、そして傅さん、邵さん、魯さん（前出の魯さんとは別人）、あいだをつないでくださった邵さん（男・前出の邵さんとは別人）、馮さん（女）ご夫妻にも、あわせて感謝の意を表したい。なお、現地の方々については、文中、すべて姓のみを記すにとどめる。

一　調査の概要

馬山鎮寧桑村

調査日時は、二〇〇九年三月六日（金曜日）。宣巻が行われたのは、中国浙江省紹興市馬山鎮寧桑村[7]の関帝廟であった。以下、宣巻開始までのことがらを記す。

当日、朝七時半ごろ、紹興の市街区南部（廊橋花園酒店）をタクシーで出発。途中、現地研究者の楊さん（男）と落ち合う。楊さんは八十一歳。もと小学校の校長先生で、郷土史家のようなことをしておられ、これまで民間芸能についての文章も発表されている。目的地である馬山鎮寧桑村は、紹興市街から北へ十キロほどのところにある。十年前は田園地帯であっただろう、広大な新興開

発地区（「袍江新区」と思われる）を通り抜け、三十分ほどで寧桑村に到着した。

車上、楊さんが、馬山鎮は堕民の多いところであると言われた。堕民は、紹興を含む、浙東地方特有の身分の名称である。明代から、戸籍の上で良民と区別され、差別を受けて、職業選択や通婚の自由を認められなかった。[8] 楊さんに、今日会う宣巻人[9]は堕民ですかと尋ねたが、わからないという答えだった。なお、復路は路線バスを利用し、一時間ほどで市街地にもどった。

寧桑村は、こじんまりとして質素な村に見えた。村のメインストリートの端と思しき場所でタクシーを降り、数百メートルほど歩いた。朝が早いせいか、開いている商店も少なく、人どおりもあまりない。狭いクリークがいくつもとおり、木製の小さな舟がたくさんもやってある〔写真1〕。途中、葬儀用の花輪屋さんと紙銭屋さんが目についた。花輪屋さんには、花輪が表に飾られ、「花輪売ります（購買花輪）」「水棺貸します（出租水棺）」と壁に直接黒ペンキで書きつけてあった（シャッターは閉まっていた）〔写真2〕。紙銭は、燃やして、神仏やあの世に行った人に送るお金である。錫箔を押した紙をふくらみのあるかたちに折り、これを糸や紐でつないで売っている〔写真3〕。この店は開いていたが、店には紙銭のほかにとくに商品はないように見えた。紙銭屋さんは、帰る途中に、もう一軒見かけた。堕民は、死者にかかわることがらを仕事にすることを特徴のひとつとする。花輪屋さんと紙銭屋さんとが目についたのは、そのためかもしれない。

いくつ目かのクリークで橋を渡らずに横に折れ、まず邵さん・馮さんご夫妻宅に立ち寄った。三階建てで、江南のある程度豊かな農村の家という体である。家は新しく、広くて明るい。手洗いも水洗だった。寧桑村の中、この一帯は、比較的豊かな家が集まっているように見えた。ご夫妻はふだん紹興市街地のマンションに住み、この日はわざわざ、宣巻のために、昼食用の食器などを携え、旧居にもどって来てくださったようだった。

家の前はクリークが交わり、広い池のようになって、舟も多く溜まっている。水はひどく汚れていて、日本の昭和三十～四十年代の「どぶがわ」を思わせた。それでも、対岸に洗濯をする人があった。

ご夫妻の家に着いてすぐ、徒歩一分、宣巻の場である関帝廟に向かった。馮さんは、古い銀貨である元宝のかたちに折った紙銭を入れた紙箱を、抱えておられる。宣

巻人たちは、すでに準備を整え、待っておられたようだった。お昼までに宣巻を終えることを考えると、八時をとおに過ぎたその時間は、もう早くはなかった。

宣巻の主催者と目的

磯部祐子さんの調査は、現地の人々が、自分たちのために、自分たちで催している宣巻に、お相伴をするかたちで行われる。筆者がとくに魅力を感じたのもこの点であった。これがそう簡単でないことは、中国で民間の芸能・文学を実地調査しようとしたことのある人なら、おそらくだれでも知っている。遠路やってきた研究者に、できるだけ上等なものを見せたい、見せようという、現地協力者の思いが、しばしばこちらの失望につながる。

この日は、現地の人々によって催される宣巻がないということだったので、磯部さんと筆者が宣巻を主催することになった。しかし、平素とほとんどかわらぬかたちで行われたと思われる。宣巻は、目的なく行うことはできない。そこで、現地協力者である楊さんと邵さん（馮さんの夫）おふたりの長寿祈願の宣巻とした。宣巻がひとたび始まれば、近隣から多くの人々が集まってくるはずである。しかし、この日は、平日の昼間の、しかも急な開催であったことから、賑わいはなかった。近所のおばあさんがひとり、数珠をくり、念仏を唱えながらやって来たのと、昼どきに数人がのぞきに来ただけだった。

二　宣巻をとりまく状況

関帝廟

宣巻が行われた関帝廟は、間口が四、五メートルくらいの小さな祠である〔写真4〕。入口の上に「関帝殿」の扁額がかかり、奉納者と思われる夫婦（邵さん・馮さんではない）の名前および「壬申年一一月廿（これ以下一～数文字が読みとれず）」の文字が記されている。「壬申年」は、もっとも最近の一九九二年であろう。馮さんによれば、むかしは大きな廟だったが、文化大革命（一九六六～一九七六）のときに壊され、改革開放後に再建されたという。廟の手前に、廟と同じくらいの広さの空き地があり、その端に、屋根つきの蠟燭立てがしつらえられ、空き地のまん中には、紙銭を焼くための大きな罐が置かれている。

廟の中は、奥がガラスケースになっていて、その中央に関帝すなわち神さまとなった関羽が鎮座している〔写真5〕、この向かって左には、観音菩薩像が安置されて

いる。ひとつの廟の中で、仏教・道教という分類に合わない、神仏の同居が行われるのは、どこでも見られることである。ガラスケースの外には、関羽にしたがう周倉と関平が、地面を踏んで、左右に分かれて立っている。関帝の前のガラスには、この日の宣巻について次のように墨書した、上部左右の角を折った黄色い紙が貼られていた〔写真6〕。神仏の像のない一般家庭などで宣巻が行われる場合には、これが神位、すなわちよりしろとなる。筆跡は魯さんのものである。

香花（香と花（を））　喧揚宝巻敬神（宝巻を高く唱えて神を敬し）

祈佑*1　家門吉慶、人口平安（家門は幸福に、人は平安に）
男増百福、女納千祥（男は百の幸福を増し、女は千の吉祥を受く）

恭敬*2　関聖帝君壇前（関聖帝君の御前に）
延生信士（長寿（祈願）の信徒）
邵○○
楊○○　敬奉（敬って奉る）

供奉（たてまつる）

＊1　祈佑（加護を祈る）　＊2　恭敬（うやうやしく）

また、同じ黄色い紙を、二枚短冊状に切ったものが、アンプの上にそろえて置かれ、それぞれ、次のように記されていた。これも魯さんの筆である。

（右）　虔備佛箱壹隻　内貯　金剛経五十巻　高王経十三巻　蓮経五十巻　敬奉　関聖帝君簽納
つつしんで仏箱一箇をそなえ申す　内にあるもの
金剛経五十巻　高王経十三巻　蓮経五十巻　敬って奉る　関聖帝君　ご笑納賜らんことを

（左）　天運歳次乙丑年二月初十四焚化　信士　邵○○
馮○○　敬奉
天のめぐり　歳は乙丑（きのとうし）の年（旧暦）
二月十四日　焼く　信徒　邵○○　馮○○　敬って奉る

これらは、宣巻の最後に燃やして、神に捧げられる。仏箱と経については、実物を確認していない。

神像の前の机には、中央奥に線香を立てた香炉がある。その手前、卓の中央には、かたちのままの蒸した鶏一羽が置かれ、四本の赤い箸が突き立てられ、赤い紙が添え

られている。この両脇に柑橘類、バナナとミニトマト、そして、机の手前端には、紹興酒の入った九つの湯飲みが、横一列に並べられている。

磯部さんと筆者も、それぞれ日本から持参した、簡単なお菓子をお供えした。

宣巻の場

供えものの置かれた机の手前、廟の入口との間の狭い空間に、正方形の机（八仙卓）が置かれ、宣巻人が着席されている。入り口から見て右側にリーダー役（頭）の魯さん（七十一歳）、以下時計まわりに、机から少し離れて二胡を弾く魯さん（以下魯さん（二胡）と記す。六十四歳）、女役（旦）の邵さん（六十一歳。以下とくに断らない場合は、この宣巻人の邵さんを指す）、そして男役（生）の傅さん（六十八歳）が座る。神像側は空いている。これは、宣巻が奉納を主眼とし、人ではなく「まず神仏を楽しませる（娯神為主）」ものだからである。

机の上には、三辺にひとつずつマイクと各人のお茶が置かれている。魯さんの右手前には木魚がある。テキストである宝巻、すなわち「唱本」（以下、「テキスト」「宝巻」「唱本」を、わかりやすさを旨として、文脈によって使い分ける）は、全員がみやすいようにして置いてある。宣巻のあいだ、みなずっと唱本を見ておられた。魯さんの話では、歌詞とセリフは、「お腹の中に入っている（在肚子裏）」ということだったが、宣巻はたいてい唱本を見て行われる。

マイクの音は、廟の外にとりつけられたスピーカーから、大音量で近隣に響き渡る。宣巻には、たいていどこでも、このようにマイクとスピーカーを使う。宣巻の「宣」に「喧（かまびすしい）」の字が用いられることも多い。大きな音によって、攘災招福の効果が上がると考えられているようである。筆者が録画をしていたので、「うるさければマイクを切るよ」と楊さんが気をつかってくださったが、いつものようすが知りたかったので、そのままにしてもらった。

祈り

宣巻は、神仏を招来し、祈りをささげることからはじまる。この日の次第は、以下のとおりであった。①神仏を招く、②祈りを捧げる、③宝巻を語りうたう、④紙銭を焼いて神仏を送る。このうち、宣巻の主要部分であり、もっとも時間を要するのは、③である。③だけを取り出

せば、宣巻は芸能に、宣巻人は芸能者に見えるかもしれない。しかし、正確には、宣巻は①～④すべてであり、宣巻は、あくまでも宗教的な儀礼である[10]。

およその時間は、祈願が十分、上巻が二十七分と四十六分で計七十三分、下巻が五十分、神送りが三分であった。この間、数分程度の小休止が、祈願と宝巻のあいだに一回、上巻の途中、テキストの入れかえ（後述）のときに一回、上巻と下巻のあいだに一回、計三回、置かれた。要した時間はあわせて二時間半から三時間弱であった。宣巻はときに終日を要するから、これは短いほうである。

祈願のときに、馮さんが線香をあげ、関帝を拝された。祈願文はテキストがなく、みなそらんじている。語りとうたが交互にあらわれるのは、宝巻と同じである。語りは魯さんが担当するが、ときに魯（二胡）さんとの対話になる。うたは、魯さんが木魚を叩いて首唱し、三人がこれに和する。祈願文は、この日の宣巻の目的や主催者などを述べていたようであるが、現在、正確な文言がわからない。後日を期したいと思う[11]。

使用言語は、祈願から宝巻まで、すべて現地の方言であった。テキストは、「白話小説」と同じく、語りの部分も含めて、口頭語ではなくやはり文章語であるから、ときに方言の語彙が混じるが、方言を知らなくても読むことができる。ただし、発音が異なるため、現地の方言がわからなければ、聴きとることがむずかしい（いまテキストのどこを、うたったり語ったりしているのか、はわかる）。

祈願文のあとの小休止のさい、磯部さんと筆者に、宣巻の演目を選ぶようにと、宣巻人の手持ちの唱本が渡された。それらの題名は次のとおりである。

「碧玉帯」「孝子宝巻」「宝蓮灯」「風碑亭」「双状元」「沈香扇」「売水龍図」「売花龍図」「双金花」「包公出世」「花亭会」「彩楼宝巻」「頼婚記」「福寿宝巻」

この中から、名判官である包拯が活躍する「売花宝巻」をお願いした。上記③宝巻を語りうたう、の部分の話は、後に譲る。

「売花宝巻」がすべて終わると、ひきつづき、祈禱と吉祥の意味をもつうたが、魯さんの木魚にあわせて、三分ほど全員でうたわれる。「売花宝巻」のあいだ、昼食の準備のためか、姿が見えなかった馮さんが廟に来て、ふたたび関帝に向かって合掌礼拝された。お昼どきになっていたので、近所の人たちが数人、どんぶり鉢に入った

ぶっかけご飯をかきこみながら、様子を見に集まってきた。

唱えごとが終わると、馮さんは廟の表に出て、廟の前の空き地で紙銭を焼く。宣巻人の邵さんが銅鑼（鑼）を、魯さんがシンバル（鐃）を打ち鳴らす。馮さんは、お辞儀をくりかえした。途中から、楊さんも礼拝に加わった。楊さんは、落ちた紙銭を拾って、火の中に投じている。紙銭は燃え残りがあってはいけないのである。

このあと、邵さん・馮さんご夫妻、楊さん、宣巻人のうち魯（二胡）さんを除く三人とともに、邵さん・馮さん宅で、昼食をいただいた。魯（二胡）さんは用があったのか「売花宝巻」がおわると、そそくさと廟を出、バイクで去られた。

昼食はオプションというよりは、宣巻とセットになった共食の意味合いがある。皿数も多く、ごちそうであった〔写真7〕。食事をいただきながら、いくらかお話をきかせていただいた。

この日の宣巻は、磯部さん（と筆者）の主催であったから、費用はこちらが負担した。磯部さんが楊さんに一千元（約一万五千円）を渡された。これに、宣巻人への謝金、食事代、邵さん・馮さんへの謝金、楊さんへの謝金が、すべて含まれている。

三　「売花宝巻」

この日行われた「売花宝巻」のテキストそのものについては、別に報告と考察がなされる予定である。[12] そこで、ここでは、この日の宣巻の報告として、最小限必要なことがらを紹介するにとどめる。[13]

現在、紹興では、とくに包拯ものの宣巻三種が、よく行われている。三種とは、「割麦宝巻」「売花宝巻」「売水宝巻」である。これらは「三包」と総称され、この順にまとめて演じられることも多い。[14] 魯さんたちは、単行の唱本と、「三包」連続の唱本、二種類の「売花宝巻」のテキストを持っておられた。

この日、見せていただいたたくさんのテキストは、ほとんど邵さんのものであるようだった。[15] これはあるいは、邵さんの自宅が関帝廟のすぐそばで、便がよかったからかもしれない。「売花宝巻」単行版も、宣巻人の邵さんのものであった。筆跡は手書きだが、コピーしたものだった。「三包」版は、魯さんが自ら筆で書かれたもので、魯さんによれば、「お腹にあった」唱本を、自ら短く

編集しなおしたものだという。宣巻は、半ばお経と同じように考えられ、「一字も脱けない（一字都不漏）」ことが重視されて、字の脱落があれば功徳が減じるとも言われる。その一方で、改編もよく行われるようである。

単行の「売花宝巻」よりも、「三包」の売花宝巻部分がコンパクトであることから、この日は「三包」版が採用された。ただし、売花宝巻は「三包」の二番目にあり、宣巻を中途からはじめるかっこうになって、都合が悪い。そこで、冒頭からしばらく単行版を用い、途中から「三包」に移行した。単行版の移行部分に、「三包のはじまり（三包龍図開始）」とはじめからメモ書きがあったから、この方法はよく採用されるのだろう。

唱本の葉数は、単行部分が十七、つづく三包の上巻が三十二、下巻が三十四、計八十三頁であった。一頁の字数は一定しないが、単行版はほぼ二十五字・十行、三包は二十字・九行である。

「売花宝巻」のあらすじを、これら、この日に使われたテキストによって示せば、以下のとおりである。

宋の仁宗の治世、河南の開封府梧桐県に劉思進という男がいた。年は二十歳。賢妻である張三娘とのあいだに、三歳の男の子があった。思進は、礼部尚書（大臣）となった劉衡徳と任氏とのあいだに生まれた、ひとり息子であった。ところが、父の劉衡徳は、都にのぼったとき、風に当たって病を得て亡くなる。知県（県知事）の王得龍は、生前、劉衡徳に恥をかかされたことがあり、これを恨んでいた。そこで、息子に復讐しようと、思進に命じて、南京へ銭糧（年貢）十二万を届けさせることにし、配下を強盗に仕立てて、途中、これを襲わせる。思進は、おつきの者をすべて殺され、銭糧をすべて奪われて、物乞いをしながら家にたどり着く。思進は途方に暮れる。（これより単行版から「三包」へ移行）

張三娘は夫に、家財をすべて売り払い、使用人を家に帰して、銭糧を賠償し、わたしが紙の切り花を作って、これを開封の都に行って売り、それで生計を立てましょうと提案する。思進ははじめ、面子を重んじていやがるが、母の任氏が賛成したため同意して、悪人にくれぐれも注意するように、と言って三娘を送り出す。

さて、天上では太白金星の神が、張三娘が百日の災いに遇う運命にあることを知り、地上に降りて、三娘を三叉路で待ちうける。そして、三娘に、死んでも死体が腐らないよう、金丹一粒をのませる。三娘は開封に着いて

花を売るが、いっこうに売れない。困って道ばたに腰かけていると、茶店、床屋、肉屋、いろんな男たちが、美しい三娘をじろじろ見たり、からかったりする。

さて、開封では、時の皇帝、仁宗の寵愛を受けている西宮の妃の父親である曹璋が、勝手放題の横暴を行っていた。曹璋は女好きで、すでに九人の妻を持っていたが、三娘に目をつけ、花がほしいと嘘を言い、邸に招き入れて、結婚を強要した。三娘は拒否して曹璋を罵ったため、金槌で殴り殺され、曹璋の邸の西の花園に埋められて、石の板と砂を交互に七重にかけられる。曹璋はその上に、芭蕉と海棠と水仙の花を植える。（上巻終）

その晩、劉思進は、妻の三娘が帰らないので、心配しながら床に就く。すると、夢に三娘が現れ、曹璋に殺されたこととそのいきさつを語る。思進が、翌朝、母の任氏にこれを話すと、考えすぎだと言われる。しかし、思進は開封へ行き、人から、昨日、花売りの女が曹璋の邸に連れこまれるのを見た、と話を聞く。そこで、劉思進は、公正無私の裁判官、包拯に訴え出ようと、包拯の輿を止め、訴状を差し出す。しかし、それは包拯ではなく、曹璋の輿であった。曹璋は訴状を読んで、劉思進を邸に連行し、水牢に入れる。

母の任氏は、嫁の張三娘ばかりか息子ももどらないので、心配になり、孫を抱いて開封へ行き、包拯の輿をさえぎって訴え出る。包拯はこの話を聞き、身を清めて、諸々の神に祈りを捧げてから、夜、裁きの場所に行く。すると、そこに三娘の魂が現れ、これまでのいきさつを語る。包拯は、そこで、配下の張龍と趙虎を曹璋のもとへ遣わし、わたくし包拯は、鄭州で散糧の仕事をして戻ったばかりなので気分転換がしたい、ついてはそちらの花園を見せてもらいたい、と記した手紙を届けさせる。

曹璋は、張三娘を埋めた西の園を避け、東の園に包拯を案内する。しかし、包拯は、西の園が見てみたいと言ってむりやり入りこみ、海棠の花がほしいと言って張と趙にひっこぬかせる。すると、石の板があり、その下から三娘の死体が現れる。曹璋は、これは下女だとシラをきるが、包拯は曹璋を捉え、裁きに臨ませて、斬首の刑を言いわたす。そのあと、包拯は張と趙に、「陰陽床」「還魂枕」「帰魂帯」を持ってこさせ、これらを使って三娘を蘇生させる。劉思進も水牢から救出されて、妻の三娘が徐々によみがえるさまを見守った。

包拯はこれらのことを仁宗皇帝に報告し、仁宗皇帝は劉思進に浙江巡按の官を与える。また、張氏には一品夫

人の称号、任氏には多くの財宝が送られる。その後、任氏は念仏精進の生活をして功が満ち、病むこともなく、百歳で昇天して、「仙」となる。

以上が、「売花宝巻」の物語りである。内容はテキストによって、少しずつ出入りがある。

宣巻は、ほぼ唱本の文字のとおり、語りうたわれた。ただし、宣巻の始まりを知らせる、冒頭の、次の四句の七言句は省略された。

買ママ花宝巻始展開
恭請神聖降壇来
善男信女虔誠聴
一年四季永無災

「売花宝巻」始めます
恭しくも神さまを　壇まで
お招きいたします
善男善女のみなさまが　つ
つしみお聴きくだされば
一年四季を　無事息災にす
ごされましょう

この部分が省略されたのは、「売花宝巻」に先立って行われた祈願が、この四句の機能を果たしていたからだと考えられる。

また、途中、無一文になった劉思進がうたう歌の部分が、そっくり省略された。物乞いの歌をうたうことは、体裁が悪いと考えられたからかもしれない。

この日、「売花宝巻」は関帝に捧げられた。しかし、「売花宝巻」の内容は関帝とかかわらない。「売花宝巻」でたたえられているのは、包拯である。包拯は、歴史上の人物であり、よく知られた物語中の人物であるが、また民間では神である。これは関帝への信仰と抵触しないのだろうか。物語りの途中には、太白金星の神が登場し、三娘を助ける場面もある。そして、宝巻一巻は、任氏が「吃素」（肉食を断ち）「念仏」を行った功が満ちて、成仏したところで終わる。後述するように、宣巻中は、くりかえし「南無阿弥陀仏」が唱えられる。仏教、道教、民間信仰など、それぞれ出身母体の異なる神格が混在することは、中国ではごくふつうに見られることである。それにしても、ここでは、一体、何に帰依しようというのだろう。そもそも、信仰そのものが、ちゃらんぽらんなのでないだろうかとすら思わせられるのであるが、そうでないことは、後に述べたいと思う。

四　音の世界

伴奏楽器

この日、宣巻の伴奏に用いられた楽器は、木魚[16]、机を打つ木片「醒木[17]」、そして二胡であった。木魚と醒木は魯さんが担当された。

二胡が使われたのは、はじめだけだった。最初から、うたと調子（音高というよりは調性）が合わなかった。調弦が違っていたのだと思われる。奏者の魯（二胡）さんはもちろん、他の三人も、はじめ二胡が鳴ったとき、魯（二胡）さんのほうを見て、何か声をかけておられた。魯（二胡）さんは、少し調弦を試みられたが、あきらめたのか、そのまま弾きつづけ、他の人たちも、その後は自分の役に集中しておられた。しかし、魯（二胡）さんも、二胡が邪魔になっていることを重々承知しておられたのだろう、十三分ほどたったところで、楽器をマイクに持ち替えて、唱和専門となられた。

このことは、当初、ただの失敗に思われたが、重要なできごとだった。

筆者は、寧桑村の後、磯部さんについて、紹興の三つの場所で宣巻の調査を行っている。いま、比較のために、それぞれの宣巻の使用楽器を挙げる。

A　銭清鎮新甸村（二〇一〇年三月二十二日）　個人宅の新築祝いであった。楽器は、木魚、二胡。リーダー役は二胡担当であった。ときに、軽琴（青海省で買ったという、ウクレレ状の撥弦楽器）が加わった。また、木魚に代わって、竹板（竹板でできた大きな長方形のカスタネット）と梆子[18]が用いられる部分があって、そこでは音楽が越劇により近づいた。

B　斗門鎮荷湖村（二〇一〇年三月二十三日）　関帝廟に村人が集まり、宣巻が行われていた。楽器は梆子のみであった。リーダー役は梆子を担当していた。

C　東浦鎮楊川村（二〇一〇年三月二十四日）　龍口廟で土地神のおまつりをしていた。楽器は木魚、二胡、シンバル（鐃）であった。リーダー役は木魚とシンバルを担当していた。

宣巻にとってもっとも重要な伴奏楽器は、木魚である。木魚は、宣巻の発祥とかかわっていて、欠かすことができない。ただし、B荷湖村の例のように、類似の打楽器である梆子に置き換えが可能である。梆子は木魚よりも音が澄んでよく響き、しかも、A新甸村の例からもわか

るように、梆子があれば演劇により近づく。荷湖村の宣巻のリーダー役は、四十歳前後の男性で、宣巻人としては年が若かった。宗教臭のする木魚をきらい、梆子に変えたのかもしれない。

二胡については、宣巻のあと、魯さんに質問したところ、「あってもなくてもよい」ということだった。これが言いのがれでなかったことは、上記の三例をみればわかる。しかも、寧桑村、新甸村、楊川村では、二胡はいずれも、うたと同じ旋律を奏でていた。同じ旋律なら、なるほど、なくてもよい理屈である。

では、なぜ二胡が使われるのかというと、そのほうが「いい（好聴）」からに違いない。二胡は、うたの旋律をたどるが、うたが押韻箇所で韻母をのばしているとき、独自に音を加える。これを聴きなれると、二胡がないのは、退屈でさびしく聴こえるかもしれない。なにより、二胡があれば、にぎやかで、見場もよくなる。

宣巻人たちは、我々の存在やビデオカメラを気にしてるそぶりを、ふつう見せない。しかし、外国人が来るとかカメラが入るということは、彼ら彼女らにとって大きなことがらであるはずで、平素と異なる緊張感をもって語りうたわれていることが、見てとられることもある。寧桑村の二胡は、このような状況のなか、ふだんあまり用いられないものが、この日、特別に登場したものではなかったか。調弦の失敗も、そのためだったと考えれば、説明がつく。

この伴奏楽器の問題、とりわけ弦楽器の参入の有無は、たんに音楽だけの問題にとどまらないで、さらに大きな問題につながっていく可能性がある。もともと、伴奏がまったくなかったり、打楽器だけだったりした一群の歌に、弦楽器や管楽器の伴奏が加わり、新たな展開を見る。同じことは、中国の歌謡史においてくりかえし起こってきた。たとえば、多くの地方劇の成立過程がそうであるし、遠い時代の話だが、漢の楽府の相和歌などにも、同様のことがうかがわれる[19]。

寧桑村で、二胡が伴奏に入ろうとして果たせなかった場面を目のあたりにしたことは、うたに弦楽器がかぶさろうとする、中国歌謡史において数限りなくくりかえされてきた場に立ち会ったということなのであった。木魚しかなかったところに、二胡などの弦楽器が加わることは、宣巻の宗教性が減じ、娯楽性が強くなることと、かかわってくる。宣巻の分類のひとつに、弦楽器の有無による「絲弦宣巻」と「木魚宣巻」の別があり、「絲弦宣

巻」では、娯楽性が強くなるとされている。[20]

しかし、この問題はおそらく単純ではない。なぜなら、これまで筆者が聴いた宣巻のうち、もっとも演奏水準が高いものが、二胡を欠く、B斗門鎮荷湖村の関帝廟における宣巻だったからである。宣巻人の声が美しく、音程が狂わない。朗々とうたい、遅めのテンポのなかで、節回しが微妙に動く。残念ながらききとり調査を行うことができなかったが、かなり芸能化（そしておそらく専業化）の進んだグループであっただろう。先にも述べたように、リーダー役は四十歳前後の働き盛りの男性で、そのことも、これをうかがわせた。

紹興で、宣巻人たち自身の口から聴く宣巻の分類に、「平巻」と「花巻」の別がある。これは、「宣巻調」と「越劇調」とも呼ばれる。「平巻」「宣巻調」は、お経のような平板な調子のものをいい、これにたいして、「花巻」「越劇調」は、越劇や民謡など、他の芸能の旋律を取り入れたものをいう。芸能的性格は、当然後者のほうが強くなる。ただし、越劇といっても、同じ旋律が果てしなくくりかえされることは、後に述べるとおりである。これまで筆者が聴いた宣巻はみな「花巻」であるが、「花巻」も一様ではない。B荷湖村では、高めの調性（ヘ長調周辺）で越劇と似た発声をしていたが、寧桑村では、低めの調性（変ホ長調周辺）で地声を使っていた。また、A銭清鎮新甸村では、先にも触れたように、同日同演目のうちに、伴奏楽器も異なる二種（二段階）のうたいかたが混在していた。

「木魚宣巻」と「絲弦宣巻」、「平巻」と「花巻」、「宣巻調」と「越劇調」といった区分の実態は、截然としたものというよりは、ふたつの山の頂上の周囲に、頂上からあるいは近く、あるいは遠く、さまざまな段階のものがちらばっていると考えるほうがよいのだろう。芸能化、娯楽化の問題も、これらの分類と単純に結びつけて考えることはできないのだと思われる。

声 ――押韻・唱和・リズム・旋律

宣巻人は、それぞれ役柄が決まっており、それにしたがって語りうたう。この日の「売花宝巻」は、ナレーションおよび包拯役が魯さん、男役（生）の劉思進が傅さん、女役（旦）の張三娘が邵さんであった。このほか、魯さんは治県の王得龍、思進の母の任氏、曹璋を、邵さんは雑役（ざつえき）役を担当された。

唱本には、担当が交代する箇所が、最初の字の右肩に、

縦線を魯さんは一本、傅さんは二本、邵さんは三本、それぞれ〇で囲んで記号をつけて、示されている〔写真8〕。これは、磯部さんが「中国民間演劇の再燃」（前掲）でつとに報告されており、その後の調査と合わせても、紹興において広く行われている方法のようである。これから述べる、旋律、リズム、唱和のしかたは、先に挙げたＡＢＣ三箇所の宣巻いずれにもおおかた当てはまる。

うたは、ひとりずつ交代で語りうたうのが原則であるが、全員がきまって唱和する部分がある。

まず、語りからうたに移るとき。散文の最後三文字をひきのばし、四人いっしょに、節をつけて読む。実質ここからうたが始まる。つづけて、テキストにはないが、「阿弥陀仏」の語を唱和によって挿入し、それから韻文に入る。

次に、押韻箇所、すなわちうたの偶数番目の句の最後三文字である。ここを唱和し、つづけて、テキストにはないが、「南無仏、南無阿弥陀仏」の句を唱和によって挿入する。これを、うたの偶数番目の句、すべてにおいて行う。宣巻が、テキストの字数から予想されるよりも、ずっと長い時間を要するのは、このためである。押韻は、呉方言の特徴を反映し、普通話（公用中国語）の「n」と「ng」音が、通押する。

うたの部分のリズムと旋律は、ほぼ一定している。たとえば、最初の二句は、次のようにうたわれる。

凡例：歌詞の行は、「／」が小節線、「｜」が音をそのまま音をそのばすところ、傍点が木魚の入るところを、それぞれ示す。

傍点が一オクターブ高いこと、白丸が一オクターブ低いことを、それぞれを示す。

思・　進　独　坐　／在・　｜　書　｜　／庁・　｜　｜・　｜・
E♭　F　E♭　C　E♭　／　D　C　B°　C　C　B°

思・　想　情　由　／泪・　｜　珠　｜　／淋・　｜　｜・　｜
G　G　B　C・　B　C・　／　G　｜　B　E♭・　／　C・　｜　B　G

南・　｜　無　｜　／仏・　｜　｜・　｜・
F　G　F　E♭　C　E♭　／　F　｜　｜　｜

阿・　｜　弥・　｜　／陀・　｜　｜・　｜　／仏・
G　B　B　C・　／　C・　B　G　G　F　E♭　／　F

思進は書斎に　ひとり居て
いきさつを　思えば涙が　ほほ濡らす
南無阿弥陀仏

最後の「仏」の字と、次の句の最初の一字が重なって、句が連なっていく。

音名をざっと当てたが、句によって（とくに奇数番目の句、その中でもとりわけD音）多少、上下するし、もちろん節回しが細かく動く。

木魚が二回連打されるところは、二打目が脱落することがある。また、うたの部分の最後の一句では、あとにつづく「阿弥陀仏」が「南無阿弥陀仏」にかわり、次のようになる。

南・ — 無 — ／仏・ — 南・無・
阿・ — 弥・ — ／陀・ — — ・ — ／仏・ — — —

一小節の長さは一定であるが、小節内では、とくに偶数番目の句の最初四字の中で、各音の長短が、比較的自由に動く。とりわけ滑稽な場面、街路で切り紙の花を売る張三娘の美貌に見とれた男たちが、たとえば酒屋の店主が代金をもらい損ねたり、散髪屋がお客の頭から血をだらだら流れさせたりといった句のつづくところなどで、リズムが活発に動く。

攢十字（十字句）も、聴いているかぎり、リズムや旋律に目立った変化は見られない。

張・三娘 — ／取・剪刀 — ／百・花剪 — ／起・ — — ・ ・
張三娘　はさみを手に取り　たくさんの　花のかたちを　切り出した

攢十字では、二十字ごとに、「南無仏、阿弥陀仏」が挿入される。

テンポは、四分音符が一分に六十九回くらいで、だいたい一定している。心臓の鼓動とほぼ同じである。緊迫した場面や、団円の部分など、物語りの展開により、速くなることもある。

こうして、同じリズムと旋律が、数時間くりかえされる。筆者は、宣巻人たちのテーブルの隅に椅子を置いて、唱本をのぞきこみながら、ずっと宣巻を聴いていた。地声が小さくないのにマイクを使われ、さらに張三娘はダミ声である。けれども、このくりかえしに耳を傾けていると、なんともいえずよい心地になったのだった。

おわりに　――聖性のありか

以上が、二〇〇九年三月六日、馬山鎮寧桑村において行った宣巻の調査の記録である。わずか半日の調査でも報告すべきことがたくさんあり、遺漏の多いことをおそれる。専攻分野が異なれば、話題も叙述のしかたもちがってくることだろう。この報告は、「売花宝巻」のテキストのなかみに踏みこまず、また、宣巻人の社会における位置などにも触れず、おもに、そのあいだにあってテキストを包みこむ、信仰の世界と音の世界に注意を向けたものである。さいごに信仰の世界について若干の考えを記して、まとめにかえたい。

中国の民間信仰は、とりわけ文字だけを追いかけていると、信仰の実態が把握しにくい。ここにいう実態とは、信者の数や信者が何をしたか、ということではなく、そこにこめられた心（ということばが適当かどうかわからないが、ほかにわかりやすいことばが見つけられない）のありかたのことである。信仰を共有しなくても、共感可能な心性というものがあるはずだ。しかし、筆者の不勉強といわればそれまでだが、それを感じることがなかなかできない。けれども、それはないのではなく、顕在化しにくいだけだ。

寧桑村「売花宝巻」は張三娘が非業の死を遂げ、包拯が悪を懲らしてこれを救済する物語りである。そのテキストに見える宗教的な要素は、太白金星と、最後の「吃素念仏」して「功満」ちたという部分くらいしかない。[21]

聖性は、テキストの中ではなく、外で可視化（可聴化）されている。それは、うたの全句数の半分、すなわち一回の宣巻に百回以上もくりかえされる「南無仏、阿弥陀仏」の唱えごとであり、また、宣巻の前後に行われた馮さんの祈りである。

この日は、聴き取り調査のための時間をとることができなかったが、昼食をとりながらいくらか話をうかがった。そのとき、馮さんが次のような話をされた。自分は、この関帝廟を大事にしてきた。あるとき、自分の息子と甥とが、遠方（寧夏と言われたと思う）へ出かけ、乗っていた車が大事故に遭った。同乗していた友人たちは、亡くなったり重傷を負ったりした。けれども、自分の息子と甥は、けがひとつしなかった。そして、これは関帝のおかげであると思う、と言われる。馮さんは、関帝の霊

験を信じておられるのだった。

また、リーダー役の魯さんに、文化大革命中、宣巻はとだえていたのですか、とうかがった。すると、女の人たちに頼まれてこっそりうたっていました、という返事が返ってきた。[22]

A銭清鎮新甸村の新築祝いの宣巻において、神に祈りを捧げたのも女性であった。当該の家の女性ふたり、すなわち、宣巻の主宰者で家の当主である翁さんの妻と、翁さんの次男の妻は、宣巻のあいだあまりその場におられなかった。しかし、神に祈りを捧げるときには表に出てきて、線香を上げ、恭しく拝礼を行われた。家の当主の翁さんなど、男性が祈る場面は、なかった。

B斗門鎮荷湖村の関帝廟でも、C東浦鎮楊川村の龍口廟における土地神の祭でも、宣巻人が宣巻を行う横で、年かさの女性たちが、あるいは紙銭を折り、あるいは数珠をくりながら、抑揚少なく、声を合わせて念仏を唱えていた。こうした場面は、磯部さんによれば、しばしば見られるという。

聖性はテキストの外にあって、見えにくい。しかも、そのことばが文字に拾われることのより少ない女性たちが、その半分あるいはそれ以上を担っている。それは、みずから説明のことばをもつ大きな信仰と同じ方法では、説明しきれないものであろう。宣巻の場に立ち会うことによって、はじめて見え、きこえてくるテキストの外にある聖性にことばを与えて、これを明るみに出していく。この報告は、筆者にとって、その最初の試みでもあった。

注

(1) 宝巻の概要については、澤田瑞穂『増補宝巻の研究』国書刊行会、一九七五年のうち、第一部「宝巻序説」の部分を参照。

(2) 現存の宝巻の目録として、車錫倫編著『中国宝巻総目』北京燕山出版社、二〇〇〇年がある。

(3) とくに『金瓶梅詞話』第七十四回には、「黄氏女宝巻」全文を含め、宣巻の一部始終が描写されている。『金瓶梅詞話』の成立年代については、目下、定説がないが、明代の嘉靖年間から万暦年間にかけてのいずれかの時期であると考えられているので、そこに描写された宣巻は、十六世紀ごろの現実を反映していると考えてよいだろう。

(4) 富山大学人文学部教授。

(5) 磯部祐子さんの一連の調査の報告は以下のとおりである。①「生き続ける宝巻（上）」『東方』一八八、一九九六年十一月所収。②「生き続ける宝巻（下）」『東方』一八九、一九九六年十二月所収。③「中国民間演劇の再

燃」『高岡短期大学紀要』第十九巻、二〇〇四年三月所収。④「浙江における灘黄系演劇の再興」富山大学人文学部紀要　第四十五号、二〇〇六年八月所収。⑤「平湖鈸子書芸人に見る中国民間芸能の今」『富山大学人文学部紀要』第五十一号、二〇〇九年八月。また、『新アジア仏教史8　中国Ⅲ　宋元明清　中国文化としての仏教』（佼成出版社、二〇一〇年）のコラム「中国の演芸と仏教―紹興の宣巻」に、紹興の宣巻の概況をコンパクトにまとめて紹介されている。

磯部さん以外の人による宣巻の研究として、社会史研究の方面で、佐藤仁史「宣巻藝人の活動からみる太湖流域農村と民間信仰―上演記録に基づく分析―」という大きな成果がある。この論文は、太田出・佐藤仁史編『太湖流域社会の歴史学的研究―地方文献と現地調査からのアプローチ』（汲古書院、二〇〇七年）の「第Ⅱ部　フィールドワーク篇」に収められている。また、この書の姉妹篇である佐藤仁史・太田出ほか編『中国農村の信仰と生活―太湖流域社会史口述記録集』（汲古書院、二〇〇八年）には、宣巻人の口述記録が収められている。この二冊には、上記佐藤論文以外の部分にも、宣巻についての有用な情報、分析が含まれる。

文学研究の分野では、磯部さんのほか、上田望氏に次の一連の科学研究費の報告書がある。『紹興宝巻研究　付「双状元宝巻」校注影印』、二〇〇七年。『紹興宝巻研究2　付「双英宝巻」校注影印』二〇〇九年。『紹興宝巻研究3　付「沈香扇宝巻」校注影印』、二〇一〇年。中国では、車錫倫『中国宝巻研究』（広西師範大学出版社、二〇〇九年）に収められるものを中心に、車錫倫氏の調査・研究が第一に挙げられる。また、紹興の宣巻の報告として、顧希佳「紹興安昌宣巻調査」（『民俗曲藝』第一二七期、二〇〇〇年九月所収）がある。顧希佳氏には、このほか、浙江の宗教的儀式における歌謡の報告が多くあり、参照することができる。共同研究の名称その他はこの文章の末尾に記した。なお、共同研究者は磯部さんと小南一郎先生（龍谷大学文学部特任教授）の計二名である。小南先生はこの二〇〇九年三月の調査には参加されていない。

（6）現地では寧双村という表記もみられた（村民委員会の看板がこうであった）。

（7）堕民については、以下を参照。木山英雄「浙東〝堕民〟雑考」『言語文化』（一橋大学）十六、一九七九年十二月。兪婉君『紹興堕民』人民出版社、二〇〇八年。

（8）「宣巻芸人」ということばがよく使われるが、芸能面が強調されるため、ここではこれを用いず、「宣巻人」とする。

（9）佐藤仁史「宣巻藝人の活動からみる太湖流域農村と民間信仰―上演記録に基づく分析―」（前掲）二五八頁に「Ⅳ　その他に分類される活動として、敬老院における文藝・娯楽活動がある。とはいえ、宣巻自体が娯楽としての性格が極めて濃厚であり、娯楽活動としての側面と他の側面と截然とは分かちがたいが、（上演記録に：松家補）単独で記されているのは神仏に関わ

（10）

る儀式が行われなかったことを示していると思われる。」という。しかし、その直後、二五九頁には、「藝能化した絲弦宣巻においても民間信仰とは密接不可分の関係にあったことが、廟や廟会、仏娘、願掛け・願ほどきといった存在から十分に推測することができる。」という。フィールドワークを重ねたすぐれた研究者によるこの記述は、宣巻における宗教性と娯楽性の問題が、一筋縄ではいかないものであることをよく示していると思われる。

(11) 顧希佳「紹興安昌宣巻調査」(前掲)、喬鳳岐「蘇州宣巻和它的儀式歌」(『中国民間文化』第十五集、一九九四年十月)に、宣巻の前にうたわれる「請仏調」「上寿調」「賛神歌」などの歌詞が紹介されている。

(12) 口頭発表が、すでに、磯部祐子「紹興宣巻瞥見」(桃の会例会、二〇一〇年九月二十六日、於同志社大学今出川キャンパス)として、行われた。この内容は、中国古典小説研究会関西例会(二〇一一年二月開催予定)においても発表され、文章化されたものが『桃の会論集』五集(二〇一一年六月刊行予定)に掲載される予定である。筆者も「売花宝巻」のテキストについて書く予定がある。

(13) 「売花宝巻」のテキストの現存状況は、車錫倫『中國寶巻總目』(前掲(2))によれば、以下のとおりである。

〇七三四　賣花寶巻　又名《包公案》、《賣花古典》。参見《張氏三娘賣花寶巻》、《龍圖案寶巻》、《售花遇佞寶巻》、《貞節寶巻》。(現存の抄本十五種。詳細は省略：松家注)

一五六七　張氏三娘賣花寶巻　簡名《張氏寶巻》、《賣花寶巻》、《張氏賣花寶巻》、《賣花記寶巻》。参見另本《賣花寶巻》及《龍圖案寶巻》。(現存の刊本七種、抄本八種。詳細は省略：同上)

ただし、これらはあくまでも図書館の世界、学術の世界のことであり、民間には無数の抄本が存在する。二〇一〇年三月に行った、銭清鎮新甸村と東浦鎮楊川村における調査でも、「三包」のテキストはそれぞれに異なっていた。

(14) 二〇一〇年三月の銭清鎮新甸村における調査では、一日を費やして「三包」全部が行われ、最初から最後までこれに立ち会うことができた。

(15) 唱本の撮影は、寧桑村でも他の場所でも、お願いすればたいていすぐに承諾してくださる。けれども、多少抵抗を感じておられる様子がうかがわれることもある。唱本は、宣巻人にとって重要な財産なのである。ほんとうは、できるだけ多くの唱本を撮影したかったのだが、時間の制約があったのと、やめたほうがいいような気がして、この日、語りうたわれた「売花宝巻」、すなわち、はじめ五分の一は単行「売花宝巻」を、残りは「三包」を、磯部さんとともに撮影した。このほか、邵さんが所蔵しておられるすべてのすべての唱本の表紙も、写させていただいた。

(16) 湯飲み程度の大きさの円筒形で、上部が小さな木魚のかたちをしている。携帯の便のためであろう。これを

箸の先を多少太くしたようなばちで打つ。音は「ポクポク」ではなく、かなり高い。

(17) 拍子木を中途で切ったような長方形をしており、掌に収めて、そのもっとも広い面を使って机を叩く。語りのときには、これでメリハリをつける。「目を醒ませる木片」ということから、この名がある。

(18) 「梆子」は、硬質の木でできた打楽器。長さ二十センチほどの、太さの異なる二本の棒から成る。きき手に握った細い棒（直径一センチほど）をばちとして、もう片方の手に持った太い棒（直径三センチくほど）を叩き、リズムをとる。筆者が見たものは、打たれる側の棒の底が平たく、卓上に置かれていたので、あるいは別の名称があるかもしれない。

(19) 『宋書』巻二十一・楽志二

但歌四曲は、漢の時代に生まれた。弦楽器の伴奏はなく、パフォーマンスをする。最初に一人がうたい、三人が唱和する。魏の武帝（曹操）はとくにこれを好んだ。当時、宋容華という者がいて、すきとおったよい声で、この曲をうたうことを得意とし、当代の名手とされた。晋よりこのかた伝承されず、それで途絶えてしまった。

相和は、漢の時代からある、古い曲である。弦楽器、管楽器が伴奏をし、節（竹製のカスタネットの類）をもつ者が、うたをうたう。（後略）

但歌四曲、出自漢世。無弦節、作伎、最先一人倡、三人和。魏武帝尤好之。時有宋容華者、清徹好声、善倡此曲、当時特妙。自晋以来、不復伝、遂絶。

相和、漢旧曲也。糸竹更相和、執節者歌。（後略）

「節」は、竹製のカスタネットの類である。但歌と相和歌が並べて記録されているが、但歌から相和歌へと展開したという意味かどうかはわからない。ただ、ここに、但歌が、一人がうたえば、三人が唱和するというのは、宣巻と共通する。また、相和歌は、弦楽器の伴奏をもち、リズムをとる者がうたうという。素朴なかたちは、時代をこえて共通するところがあるのではないかと思う。

(20) 佐藤仁史「宣巻藝人の活動からみる太湖流域農村と民間信仰―上演記録に基づく分析―」（前掲(5)）参照。

(21) 刊本では、「南無阿弥陀仏」あるいは「南無観世音菩薩」などのことばが、散文から韻文に交代する箇所に記されることがある。

(22) 魯さんには、昼食時、以下のこともうかがった。父親は農業をしていた。自分は、若いとき、軍隊にいたこともあるが、ずっと労働者として会計の仕事をしてきた。宣巻は親からではなく、「老先生」について、三十歳すぎから学んだ。ひそかに学んでいたのである。今は仕事を退職し、宣巻が本業となっている。若い人を教えることもしている。馬山には五十人くらい宣巻をする人がおり、三十代の人もいる。女性が多い。自分は毎月二十五回くらい、宣巻に呼ばれる。宣巻は元手が少なく、儲けの多い仕事である。宣巻は、まず神さまを楽しませることが大事（娯神為主）で、人に善行

を勧めるもの（勧善為本）でもある。

この報告は、科学研究費・基盤研究（C）「中国近世唱導文藝研究―江南地域における実態調査」（二〇〇八年度～二〇一〇年度、研究代表者：松家裕子）の成果の一部である。

写真１　寧桑村の風景―クリークと舟

写真２　花輪屋さん

写真３　紙銭屋さん

写真 5　関帝像

写真 4　関帝廟

写真 7　昼食

写真 6　神位

写真 8　「売花宝巻」テキスト（魯さん筆の抄本）